芥川賞全集

第八巻

文藝春秋

芥川賞全集　第十巻

著者　三木卓　森敦　野呂邦暢　阪田寛夫　日野啓三　林京子　中上健次　岡松和夫

昭和五十七年十一月二十五日　第一刷

定価　一八〇〇円

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

本文印刷　理想社印刷所
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本
製函所　加藤製函

万一、落丁乱丁の場合はお取替え致します

Printed in Japan

目次

三匹の蟹　大庭みな子　5
年の残り　丸谷才一　37
赤頭巾ちゃん気をつけて　庄司　薫　89
深い河　田久保英夫　187
アカシヤの大連　清岡卓行　235
プレオー8の夜明け　古山高麗雄　297
無明長夜　吉田知子　339
杳子　古井由吉　399
選評　489
受賞者のことば　563
年譜　571

题　装
字　丁

中　粟
田　屋

功　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芥川賞全集

第八巻

三匹の蟹

大庭みな子

（第五十九回　昭和四十三年上半期）

講談社文庫「三匹の蟹・青い落葉」（昭和四十七年十一月発行、昭和五十六年九月第五刷発行）収録の「三匹の蟹」を底本とした。

海は乳色の霧の中でまだ静かな寝息を立てていた。蘭草のような丈の高い水草の間では、それでももう水鳥が目を醒ましていて、羽ばたいたり、きいきいとガラスをこするような啼声を立てていた。灰色の汚れた雪のような鷗はオレンジ色のビイ玉のような眼をじっとこちらに向けて横柄に脚で砂を掻いてはぷい、と横を向いた。

歩いていると、霧が流れてくるようであった。由梨は破れたストッキングの間でざらざらする砂を、たわめたあしのうらで脇に寄せるようにしながら歩いた。海は黒味を帯びた藤色であった。バスの停留所の黄色い標識のところには鳥打帽を被ったズックのボストンバッグを持った若い男が一人待っていた。

「霧があがれば、いい天気になりそうだなあ」

男は由梨に言うとも、独り言ともとれるようなうなずき方で言った。

由梨は霧の流れていく、濃い乳色の壺の奥でかすかに光っている海に目をとめたままの姿勢で、あしのうらの砂をたわめた小指の先でしきりに脇に寄せた。暫くして、目を落すと、蟹が二匹連れ立って由梨の爪先からほんの二三十糎のところを這っていた。蟹の甲羅は甲羅であって、顔ではないのだが、どういうわけだか、由梨はいつでもそのいびつな蟹の甲羅が顔に思えて仕方がないのである。蟹は潤んだ二つの長い眼を突き出していた。二匹の蟹は脚をもつれさせるようにして這っていた。甲羅の両端は尖っていて、海の色とそっくりの暗い藤色の殻であった。

「バスが来たよ」

鳥打帽の男は言った。

一番の郊外バスには五六人の客しか乗っていなかった。

「どうしてこんなに霧が濃いんだろう」

霧は首筋にも肩にも吹きつけるように流れてきた。

「L市まで」

由梨は手提のジッパーをはずしながら言った。

「八十五セント」運転手兼車掌は言った。

そんなに遠くまで来たのかと思いながら金を探したが細

かいのが足りなかった。二十弗札があった筈だと札入れの方をあけて見たが、無かった。後で鳥打帽の男が待っていた。

「ちょっと待って、席に坐って探しますから」

由梨は一番前のあいている席に腰かけて、財布を調べ始めた。無かった。昨夜出がけに確かに入れた二十弗札が無かった。いつも大きい紙幣は札入れの方に入れて、小銭はパチンと口のしまるがまぐちの方に入れておく。がまぐちには六十五セントしか無かった。

鳥打帽の男が隣にどすんと坐った。

「どうしたんだい。金を落したのかね」

「そうらしいの」

由梨はなおも手提の底に落ちていはしまいかとまさぐった。小銭が二つ三つ指先にさわった。それをあつめて由梨は運転手に払った。

「遊園地のところに止まるでしょうか」

由梨は訊いた。

「どの入口？」

「オペラハウスの方」

「北口かね」

「だと思うけれど」

由梨は車の鍵はある、と手提の中でまさぐりながら言った。

「すぐ近くに止りますよ」

運転手と鳥打帽が同時に言った。

彼女はもう一度財布をしらべた。札入れの二十弗紙幣は見つからなかったが、小物を入れるポケットの中からくしゃくしゃになった一弗紙幣が出て来た。口紅のついている萎えた紙幣であった。

「霧が深いなあ——」

鳥打帽の男は再び独り言というでもなく、由梨に話しかけるでもなく、言った。

由梨は霧の中に沈んでいく濃い藤色の海と、陽の光の増し始めた中で妙にうら哀しくまたたいている「三匹の蟹」というネオンを代る代るに眺めていた。

由梨はお菓子の粉を混ぜ合わせながら、胃の奥の方で微かな痛みを感じた。彼女は機械的に卵を割りほぐし、バターをこね合わせ、ベーキングパウダーや塩をふり入れながらまるで悪阻(つわり)の時みたいに生唾が咽喉元まで上ってくるのを感じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

梨恵は生クリームを泡立てていた。彼女はあとでミキサーについた生クリームをなめたいのである。
「誰と誰が来るの」
梨恵は指で生クリームをなめながら言った。
「誰でもいいのよ。大人のお友達は誰と誰が来るなんて、また、スーザンなんかに言わないのよ」
由梨は胃の痛みをこらえながら言った。
「ふん」
梨恵は白い眼の部分を多くして言った。
「ママはね、誰にも本当のことを言えないから、時には梨恵にほんとうのことを言いたくなるのよ。たとえばサーシャが大嫌いだとか。お菓子なんか、吐きそうになるほど嫌いなのに作らなきゃならないとか。でも、そういうことをひとに言わないのよ。ママが、変なことを言ったら、ママは馬鹿だなあ、と思って黙って聞いておくだけにするのよ。ママは馬鹿かも知れないけれど、可哀そうなんだから、時には親切にするのよ」
由梨は粉をまぜ合わせながら、今夜はもうどうしたって、ブリッジはするものか、と心に決めた。
武が酒の瓶をおろしながら、口をへの字に歪げて言った。
「そういうことを子供に言うものじゃない。君は大人の癖に耐えるということを知らん。いいか、梨恵、ひとは誰でも耐えなくちゃならんのだ」
武は言った。
「ふん」
梨恵は一層白い眼の部分を多くして言った。
「ねえ、悪いけど、わたし、とっても胃が痛くて駄目だから、誰か、もうひとり招んでよ。ねえ、こうするわ、わたしが病気だなどというと、みんなが遠慮するから、わたしは急に用ができて、出かけることにするわ。それにねえ、わたしなんぞいたってちっとも面白くないじゃないの、下手くそだし」
「ホステスのいないブリッジパーティなんぞあるものか」
「姉がサンフランシスコから寄り道でよって、今夜、逢うことにするのよ。いいから、わたしが言うから」
「そんなに厭がらせがしたいのか」
「厭がらせですって。こんなに平和的に言っているじゃないの。無理に我慢していて、とんちんかんな受け答えをして、お皿をがちゃがちゃと壊すより、消えていなくなった方がよほど礼儀正しいじゃないの」
「どうして我慢する、などと思うのだ。君はだいたい傲慢だ。君が他人に我慢すると思うのは自分が秀れている、と

思うからだ」
「ふん」
由梨はもう少しで涙がでそうになるのを辛うじてこらえてつづけた。
「ひとの気持に反応せずにはいられない、ということでは自信がありすぎて傲慢かも知れないわね。ある種のひと達は相手の気持がわからないし、また、あるひと達はわかっても無視しますよ。わたしは感傷的に出来ているから、わたしが包んでやったことに対して包み返してくれないようなひとは嫌いなのよ。心をこめれば腹が立つから、こめない方がましじゃないの」
「勝手にしろ」
武はウイスキーをなめながら憎々しげな眼で由梨を見た。
「ああそうだ、松浦嬢がいい。才媛で、セックスアッピールがあって、吹き屋で、ひとのうちに呼ばれるのが大好きな、松浦嬢がいいわ。あのひとは女主人(ホステス)のいない家ならどこでも大好きよ」
梨恵はそういう時の母親は大嫌いだと思い、つい、父親に同情する。彼女は十だが、年の割に賢い方なので、大人の話は割合にわかるのである。
「ああ、松浦さん、ね、あなた、急にだけど、ブリッジに来ない？　わたし、急に姉が出て来てね、どうしても逢いにいきたいのよ。明日の御勉強、おさしつかえ無くって。まあ、ありがたい、恩にきるわ。何しろね、あなたのようなお若いお嬢さんがいらっしゃると、座が華やいでいいのよ。ああ、ほんとうによかった、いいこと――、ええ、そうなの。横田さんにあなたのところに寄って、連れてきていただくようにお願いするわ。ええ、わたしの方からお願いします。ええ、二卓です」
由梨は電話をかけ終るといくらか気が軽くなって、武の機嫌をとってもいい、という気になった。
「わたし、ほんとうに駄目なのよ。癌か、もしかしたら、子供が出来たのかも知れないわ」
武はコップにあてた唇を少し歪めて含み笑いをした。
「それはおめでとう。天下泰平だ。それで、予定日はいつだい」
「十二ヵ月ほど先よ」
「九ヵ月先にしようじゃないか」
「あなたも、弱音を吐くようになったことね。わたしはいつでも十二ヵ月先という線でうろうろしているのに」
「いいかい。子供の前で嘘を言ってはいけない。たとえば、サンフランシスコから姉が来るとか。梨恵は来ないのをち

ゃんと知っている」
「梨恵は心が細やかで、お頭がいいから、ひとの感情を害さないようにするためには害のない嘘は罪悪じゃないということぐらい、ちゃんとわかっているのよ。タララララ……」
「はずれた歌を歌わないでくれ。僕は耳がいいんだ」
「子供の前で、嘘も言えないし、本当のことを言ってもいけない。タララララ、松浦嬢には性的魅力があるとか、サーシャはバラノフ神父の奥さまで、パパの女友達だとか、ママはそういうお客を呪いながら、お菓子をつくっているとか。あーあー、お菓子の中から、ぱっと黒い鴉が十羽もとび出したら、ふっふ。タララララ」
「当り前だ。ママが、スタイン氏と寝たことがあるから、ロンダとスタイン氏の仲人役をこれっとめているなどというわけにはいかない。いいかい。世の中には尽さなきゃならない礼節というものがある。つまり、誰でもが心の中で思っていることは決して口に出して言ってはならない」
「子供の前では、甘い優しい創り話。きれいなお姫さまと凜々しい王子さまが恋をして、ガラスのお城に棲んで、夢の綿菓子を食べて、タララララ」
「お願いだから、そのタララララはやめてくれ。君はカルメンになったつもりで歌っているんだろうが、僕にはヨーデルを練習しているとしか聞えないね」
「まあ、素敵、わたしは、スイスの山小屋の羊飼いの娘」
由梨はぱたんとオーヴンの蓋をあけた。
「あなた、このお菓子はね、もしもあたしが銀座で開業したら、たちどころに一財産築ける程の、世界に一つしかない処方箋の素晴しい高級品なのよ。わたしがこのお菓子にかけている夢は、たった一つ、あのサーシャと松浦嬢を豚のように肥らせて、心臓病にすることです」
「心臓病にするまで肥らせるには一財産つくるどころか、一財産潰さなきゃならない」
「どうして、あなたはそう、写実主義に固執するんでしょうね」
「靴下に穴があいているよ、膝小僧のちょっと上に」
「あなた、靴下に穴があいているのは、煽情的だって言ったじゃないの」
「女と、場所によるね。何でも公式主義はいけない」
由梨はブリッジをしないことに決めたので大分心が柔いで来て、化粧などする気分になった。
洗面所の鏡に向ってアイライナーをひいていると梨恵がやって来て、手を後に組んで女校長みたいな口調で言った。

「ふん、ママ、若く見えたいのね」
「そうよ。女は誰でも若く見えたいのよ」
「だけどね、ママ、みんな梨恵がいるのを知っているから、少くとも三十より若いとは思わないわよ」
「十六ぐらいで子供を生む女のひともいるわよ」
「そういうのは不良少女よ」
「どおお、ママ、二十六に見えると思う？」
「梨恵はもう知っているから、知らない時のような気分になれないのよ」
「何だって、いつまでそこに突っ立っているの。ひとを批評ばかりするのはよくないことよ。殊に女の子は嫌われます」
「おしっこをしたいのよ。だから待ってるの」
「ママは男の子じゃないから、横を向いていてあげるわ」
「いいわよ。また後で」
梨恵はお下げの髪をぷいとはね上げて出て行った。娘の梨恵が自分を見る眼つきの中に由梨はいつでも反射的に母親の眼を思い出した。由梨はかつて自分が、梨恵が自分に向けていると同じ眼で母親のことを見たのを思い出すのであった。
彼女は一番気に入っている青味がかったグリーンのボーネックのワンピースを着て、燻銀の長い首飾りをした。それは奇妙な、抽象的な銀の切れはしを鋲でつなぎ合わせた細工で、彼女が今でも心を残している男友達が三年前の誕生日に贈ってくれたものである。ちょうど、珊瑚の枝の切端しのような銀の破片はみんな先がまるくなっていて、強いバーナーで手加減しながら溶かし恩いのままの形をつくったものらしかった。それを燻して、ところどころ磨きをかけて、部分的にきつい銀の光がきらめくようになっていた。
ブリッジテーブルをならべた客間で、武はソファに寝ころんで日本人の留学生が持って来た週刊誌を読んでいた。
「コーヒーも、お茶も、お菓子もみんなちゃんと用意してございますわ。旦那さま。カクテルは御自分でおつくりになれますわねえ。グラスは、マルティーニグラス、オールドファッション、ソフトドリンクと三種類出してありますからね。ナプキンはいつもの箱に入っています」
「君は、ときどき、とてもきれいになるねえ」
武はちらと由梨を見て、カラーのヌード写真を高く掲げながら言った。
「ちょっとお客と喋っていけよ。せっかくおめかししたんだろう。それに、僕は君のように嘘をつくのがうまくないからね。ちゃんと、みんなの諒解を求めておいてくれよ」

「オリーヴが少し足りないかもしれないけれど、足りなくなったら、オリーヴ無しでもよろしいでしょう。ジンが無くなったら、ウオツカ使って下さい」
　呼鈴が鳴った。
「ほら来た」
「ヌードの週刊誌なんぞ、片づけておいて頂戴。日本の雑誌はめずらしくて、すぐぱらぱらとやるんですからね」
「気どることは無いさ。どこの国にだってある。みんなみたがっている」
「男だけのパーティの時にどうぞ」
「女だって見られたい癖に」
　由梨はドアをあけた。
　フランク・スタインだった。茶色いコールテンの上衣にスウェードの編上げ靴をはいていた。
「仰せの通り、こういう身なりで来ましたけど、ユリはいやにおめかししてるじゃないの」
「それがね、ちょっとまずいことがおきてね。姉が急に電話をかけてよこして、今夜、二三時間ほど通りがけに時間があるからって、外であうことになってるの。よろしいかしら。わたし、失礼して」
「そりゃまた。ほんとはここに呼びたかったんじゃないの」
「いいえ、他の連れがあってね、飛行場で乗換えの時間が二三時間あるきりなのよ。だから、――」
「タケシはいいの？」
「僕はブリッジの方がいいねえ。それに、女房がいないとどういうわけだか、馬鹿つきにつく」
「そういうわけでね。まあ、お坐り遊ばせ。わたし、いそがないの。ちょっとお喋りしていくわ。皆さんと」
　フランクは挑むような眼つきで由梨をみた。
「残念だな、ロンダが来るのに」
「ええ、武も残念がっていますよ。サーシャがくるんでね」
　由梨はそっけなく言った。
「しかし、神父がついてくるんじゃ――」
　フランクは言った。
「ヴェトコンのからだの一部を切りとって戦利品代りに持って帰ることが流行っているそうじゃないか」
　武は今までの話を全部きいていなかった、という風に言った。
「そうかい。そんなこともあるんだろうな。いつの時代だって、戦争というのはそういうもんさ。電気椅子送りにな

らずに、人殺しとか強姦とかいう男の夢を果せるんだしな。しかし、何だぜ、タケシ、皆が来る前に言っとくけど、ヴェトナムの話をパーティで持ち出したってほんとうのことを言う者なんていやしないよ。顔色の探り合いをすることはよそうじゃないか。日本人はアメリカ人にぺっと唾を吐きかけながら、そっぽ向くだろうし、アメリカ人は同国人の前じゃ牡蠣みたいな殻をかぶるだけさ。おそらく、堂々と我が意を得たりとばかり演説をぶつのはバラノフ神父だけだろうよ。何しろ、心の中ではどう思っているにしろ、神様がいるんだからね、神父には。神様ってのはまったく便利だよ。人殺しは神の御心にそむく、と熱弁をふるったって誰も文句を言わないんだ。全くいいねえ。他の理由は許されない。彼氏、得意になって鼻をうごめかせて一席ぶつさ。そいつをサーシャは神父の哀れっぽい寝床の醜態を思い出しながら、ふふんときいて、『あたしゃ、いつだって戦争はきらいよ』と女の非論理的であるという特権をここぞとばかり振りかざして、幾分儀礼的な意志表示をするぐらいのもんさ。

大学の職員ですら、半数は戦争参加に協力的で、あとの三分の二はみてみぬふり、あとの三分の一が、ひねくれた器量の悪い娘の男の挙足とりみたいな反戦論をがみがみとがなり立てるだけさ。大方の者にとっちゃそんなことはどうだっていいんだ。兵隊にとられたらとられたで、弾のあたらないところを選って歩くぐらいしかやり方はないんだしな」

「わたし、不思議でならないのは、どうしてあなた方アメリカ人が、二言目には、優美に、名誉をもってヴェトナム戦から身を引くまではという言葉を繰返すのかわからないのよ。あなた方は老いぼれ英国人の気取りをせせら笑ってる癖に、御自分のことになると、西部劇の二枚目気取りが捨てられないのね」

「アメリカ人の中には南部の田舎紳士の強情さ、西部の無法者の気取り、北部のやっかみ屋、東部のエゴイストとあるが、僕は世界主義者（コズモポリタン）なんでね。君達だって、流浪の民で、根無草じゃないか。日本人とはいうものの」

「だから、わたし達は素敵な歌が歌えるんじゃないの。サーシャにしたって、横田さんにしたって、ここにあつまるひと達は、多かれ少なかれそうですよ」

「まあ、他人は信じない方がいい」

フランクは由梨の眼を刺し通すような眼で見据えて釘をさした。

「おどろくじゃないか。俺達外国人まで徴兵に応ずる義務

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com